報告4
モンゴル国ウイグル時代地方官衙シャルツ・オール1遺跡の発掘調査と研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木山, 克彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000282

報告４　モンゴル国ウイグル時代地方官衙シャルツ・オール１遺跡の発掘調査と研究

木山　克彦（東海大学）

はじめに

シャルツ・オール（Шалз уул）１遺跡は、モンゴル国ドルノド県バヤンドゥン郡、オルズ（Улз川の南岸に位置する（N49°23′43.24” E113°37’ 34.11”）。現在のモンゴル北東国境にあるが、古代・中世にモンゴル高原に興起した国家にとっても境界にあたる（図１）。但し、ただの辺境ではなく、拓跋鮮卑や蒙兀室韋などの故地に近接し、北東アジア史の展開を把握する上で重要な地域である。またオルズ川はチンギス・ハーンの飛躍する契機となった「オルズ河の戦い」の舞台としても知られる。しかし、この地域の考古学調査は、これまで全く行われてこなかった。本遺跡も近年見つかったものである。2014年、白石典之氏が衛星画像で城の痕跡を見つけ、翌2015年に笹田朋孝氏とイッシツレェン氏が現地で確認した。2017年に木山も現地踏査を行い、2018年以降、佐川正敏氏、臼杵勲氏、正司哲朗氏とともに計４回の発掘調査を行ってきた。モンゴル科学アカデミーとの共同調査である。

１．遺跡の概要

遺跡は比高30～50㎝の土塁で囲まれた城址で、東西100m、南北70m程度の長方形を呈する（図１）。城内は、中央西寄りに基壇が２基並び、北東隅に区画を持つ。南西外壁には土塁で区画された空間が取り付く。尚、遺跡から西に約490mの地点に約40m四方の方形土塁がある。北東－南西方向に傾く。遺物は確認できていない。更に約280m西には遺跡の名称由来となるシャルツ・オール（モンゴル語で「赤い・山」）がある。山頂には礎石建物跡があり、シャルツ・オール１遺跡と同時期の軒平瓦が散布している。これら３地点は直線上に並んでおり、同時に機能したと考えられる。

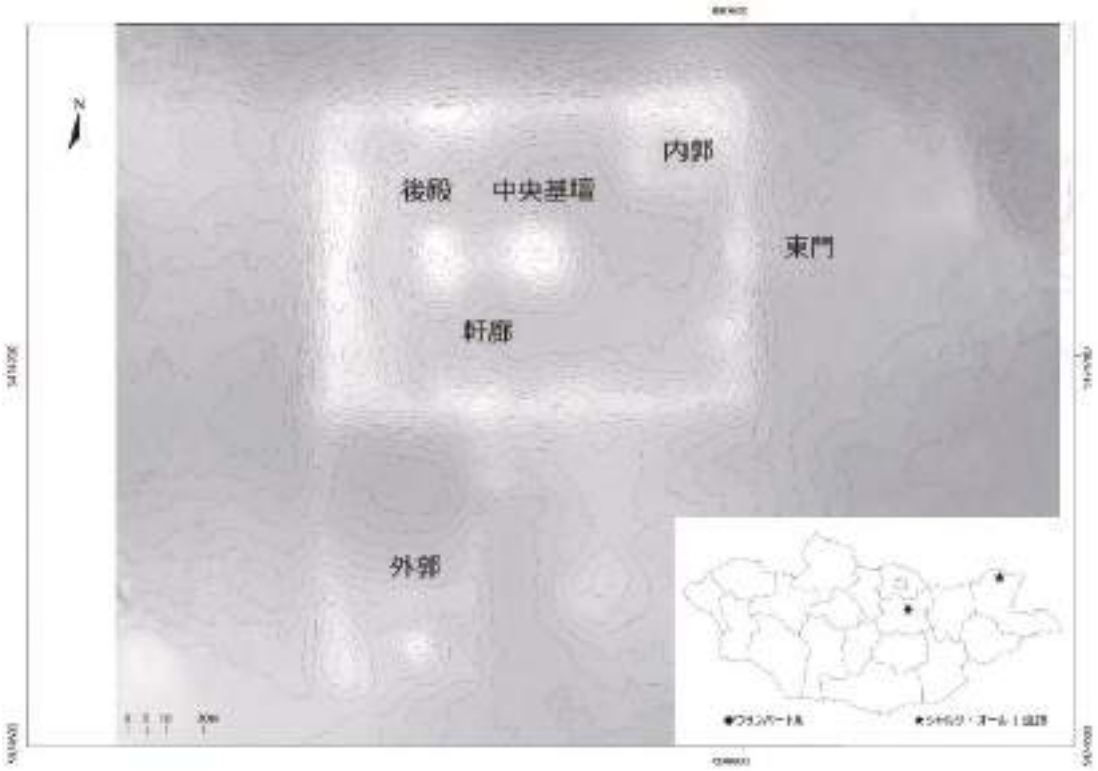


図１　シャルツ・オール１遺跡

2．発掘調査の概要

これまでに中央基壇、後殿、東門、中央基壇と後殿を繋ぐ軒廊を発掘調査した。

中央基壇：2018、2019年調査（写真１、２）

礎石が地表面に露出していた。しかし基壇上は大規模な攪乱を受け、礎石も原位置を留めていなかった。基壇上面は、南北長（間口）15.6m、東西長（奥行）14.1mとなる。唐尺（１尺＝29.6㎝）では52尺、47尺となり、正方形に近い。東面には幅3.6m（12尺）で、2.4m（８尺）の出となる階段を持つ。基壇西面には幅5.8m（20尺）のスロープが付く。南北面に付帯設備はない。基壇周り、スロープ脇、階段には長方形塼（36×18×6㎝）が使われていた。最下段には塼の小口を外にして敷き、その上に小端面を外にして重ねる。階段は、小口面を外に向けて２枚重ね、１段とする。内側にずらして次の段を作る。スロープ内には方形塼（18㎝）を敷く。

写真１ 中央基壇東面階段

写真２ 中央基壇西面と軒廊接続部

写真３ 東門基礎区全景（南から）

写真４ 東門南西隅地覆材（西から）

写真５ 後殿東面と軒廊接続部

写真６ 後殿西面階段

城全体が東西に長軸をもつこと、中央基壇東面に階段があること、その前面が広場状になっていることから、城は東正面であると考えられた。

東門：2022年調査（写真３、４）

正門は東にあると予想されたため、中央基壇の東西の中軸線を東面城壁まで延長して発掘区の北縁とした。中央基壇と東門が中心を揃えた配置なら、東門の南半分を把握できると考えたためである。はたして、予想通りの位置に遺構を検出した。門の上屋を支える基礎となる地覆材である。マツ属の板材が直交して組まれていた。東西方向の板材の上部の一部を掘り下げ、そこに南北方向の板材を落とし込み繋いでいた。顎掛け仕口である。材の連結部付近では柱の下端が残存していた。柱を外すと、正方形のほぞ穴が穿たれていた。遺構全体の南西部分の調査結果ではあるが、地覆材は井桁に組まれたと考えられる。中央には門の敷居も検出された。井桁に組んだ地覆材の規模は、南北間で約5.4m（18尺）であった。東西間は、城内側の地覆材と敷居は2.4m（８尺）、城外側の地覆材と敷居は2.7m（９尺）と17尺の設計であった。

唐から宋代にかけての城門の上屋を支えは、過梁式か殿堂式が一般である（城倉2021）。井桁の地覆材の四隅に立てた主柱として門の上屋を支える本遺跡の事例は、従来にない新形式の事例となる。

後殿・軒廊：2023年調査（写真５、６）

次に後殿の構造と、中央基壇西面のスロープがどのように後殿に繋がるのかを把握するための調査を行った。後殿の規模は、東西長（奥行）12.9m（43尺）、南北長（間口）19.5m（65尺）の長方形で、西面には1.2m（４尺）の出となる階段が付く。南北面に付帯施設はない。中央基壇から降りたスロープは一旦下り、後殿に向かって再度昇って連結する。後殿とスロープの接続部には、径50㎝ほどの礎石の据え付け痕が検出できた。後殿東面の南北に２か所（4.2m:14尺）、中央基壇方向に２か所（3.9m間隔:13尺）で並ぶ。大量の瓦が出土しており、中央基壇と後殿は軒廊で繋がっていたことが分かった。

城の設計・建物配置

以上の調査で、それぞれの建物の中心、距離が判明した。中央基壇は、東西壁から54ｍ（180尺）、南北壁から39m（130尺）と城の中心にあり、後殿は54m（180尺）の半分の27m（90尺）に配置されていた。中央基壇と後殿の階段南縁と、軒廊の礎石据え付け痕の軸線も揃えており、高い規格性で設計、測量、施工したことが明らかであった（図２）。

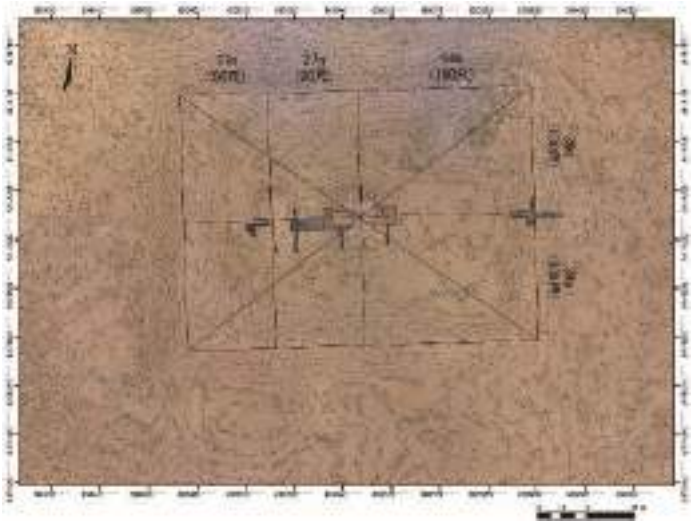


図２　シャルツ・オール1遺跡設計復元

出土遺物

土器２点、鉄製品３点の他は、瓦と塼である。鬼瓦、鴟尾など飾り瓦はないが、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦（切り面戸瓦、割り熨斗瓦など）が一通り出土した。東門では隅切り平瓦が出土していることから、門の上屋は切妻屋根ではないと考えられる。軒丸瓦は、いずれも素弁蓮華文だが、３種に分けられる（図３）。また各種は出土地点が異なるため、建物ごとに葺き分けられていたと考えられる。これも城の規格性の高さを表すものである。また、別種類の軒瓦の混在も認められず、創建以降、屋根瓦の大規模な補修はなく、存続期間も長くないと考えられる。

４．年代推定－出土軒丸瓦・城郭形態の比較から

出土遺物と城の形態的特徴から遺跡の年代を検討したい。

軒丸瓦の比較検討（図３）

軒丸瓦の特徴から唐代と考えられる。突厥時代末のホショー・ツァイダム（Khöshöö tsaidam）遺跡

（キョル・テギン廟跡は732年、ビルゲ・カガン廟跡は735年に造営）出土の軒丸瓦は、弁区に単弁８弁蓮華文とT字形の間弁を置き、中房は圏線を有する半球形で周辺蓮子がなく、内区と外区の間には圏線を巡らし、外区内縁には珠文32個（４個×８弁）を巡らし、外縁は幅広の素文で、内区よりやや低い。文様は全体として精緻かつ整然としている。

ポル・バジン（Пор Бажын）遺跡は、ロシアのトゥヴァ共和国に位置し、ウイグル可汗国期の可汗の離宮やマニ教寺院跡と推定される。年代は、放射性炭素年代で８世紀後半とされる。777年造営と限定的に年代を示す研究も出されている（Kuitems et.al2020）。同遺跡出土資料は、弁区には楕円形で平板な素弁８弁蓮華文と逆三角形の間弁を置き、蓮弁は簡略化されている。また、外区外縁は、ホショー・ツァイダム遺跡例に比べ、幅広い。

ウヴル・ハヴツァール（Uvur Khavtsal）遺跡は、ウイグル可汗国の首都ハル・バルガス（Хар балгас）遺跡の西方に位置する墓園である。９世紀初頭と推定される。（中国内蒙古自治区文物考古研究所ほか2008）。複数の軒丸瓦の弁区の蓮弁はすべて素弁で、その形状は円形、逆三角形、珠文状、不整形であり、ボル・バジン遺跡例に近いか、それよりも精緻さを欠いている。外縁幅の広さもボル・バジン遺跡例に近い。

突厥末期からウイグル可汗国の蓮華文は、蓮弁が精緻で弁区が立体的なものから、逆三角形、珠文状、不整形と簡略化し、弁区全体も平坦になる。また外区外縁も幅広になる。

シャルツ・オール１遺跡出土例は、輪郭線のない蓮弁となり、精緻さを欠くものの、依然として、雨だれ形を保持し、立体的である。外区外縁も、ポル・バジン例ほど幅広くない。型式学的に、シャルツ・オール遺跡は突厥時代末のホショー・ツァイダム遺跡より後、ウイグル可汗国中期８世紀末のポル・バジン遺跡より前に位置する。以上から、ウイグル時代初期と推定される。唐の横塞軍軍城（744～759年）に比定される新忽熱古城例（内蒙古自治区文物考古研究所2018）に近似する点もこの推定を支持する。今後、存続年代も長く、調査も多いハル・バルガス遺跡の軒丸瓦の分析を行った上で、再検討したい。

図３　シャルツ・オール１遺跡の軒丸瓦と比較資料

ウイグル可汗国の城の特徴（図４）

モンゴル高原で城が造られる時期は、匈奴、ウイグル可汗国、契丹、元と限定的である。ウイグル可汗国の城は、現在のモンゴル国内を中心とし、匈奴の城の分布と近似する。新唐書回鶻伝の記載「斥地愈廣、東極室韋、西金山、南控大漠、盡得古匈奴地」と対応したものだろうか。しかし、分布の集中地域は匈奴と異なり、首都ハル・バルガスのあるオルホン渓谷に集中し、ウイグルの起源地であるセレンゲ川流域やトゥヴァ共和国でも比較的多く見つかっている（Очир нар.2019、木山ほか2022）。以下は、ウイグル可汗国の城址に特有な特徴と考えられる。

東正面；城址の多くは東を正面とする。設計尺や用いられている瓦の製作から明らかなように、唐からの技術で作られているが、唐の城址は南を正面とする。東正面は、遊牧集団の東信仰の現れと考えられる。前代の突厥の祭祀施設である方形の石囲いの前に並ぶバルバルも東向きが基本であるため、この伝統をひいたのであろう。モンゴル高原の匈奴の城址も契丹の城址も東正面とはならない。尚、契丹の首都上京臨潢府は、初期は東正面であるが、モンゴル高原に契丹が進出する頃には、南正面での築城になっていたようである。

二城構成；主郭と副郭からなる城である。主郭に比べて副郭は城壁が低い。ハル・バルガス宮殿址、チレン・バルガス（Чилэн балгас）遺跡、ヘルメン・デンジ(Хэрмэн дэнжийн балгас）遺跡、ツァガーン・スミン・バルガス（Цагаан сүмийн балгас）遺跡が、二城構成をとる。唐の都城における宮城と皇城の関係を模したものと想定される。但し、主郭である宮城に生活痕跡は窺えず、儀礼空間としての役割に特化しているのであろう。

両袖突出門；門の両脇、あるいはやや離れた箇所に突出する土塁が付加される門構造である。ハル・バルガス主郭東門、チレン・バルガス主郭南門、ポル・バジン遺跡の主門が該当する。唐の都城における墩台、闕楼（城倉2021）に類する構造が想定される。匈奴と契丹の城址にはこのような門はない。尚、契丹には甕城の門があるが、ウイグル可汗国期にはない。

二城構成と両袖突出門に関しては、唐の都城の模倣と考えられ、城の中でも格が高いといえよう。可汗に関連した城あるいは可敦城と想定したい。

発達した角楼；平面形は、方形あるいは長方形が基本であり、その四隅を突出させる城址や馬面をもつ城址がある。匈奴の城に馬面・角楼はない。契丹の城には角楼があるが、ウイグル可汗国期のものの方が大きく突出する。ハル・バルガス宮殿址、チレン・バルガス遺跡、ヘルメン・デンジ遺跡、バイバリク遺跡に認められる。

城内隅の区画；城内四隅の一つに設けられた独立した区画がハル・バルガス宮殿址、チレン・バルガス遺跡、シャルツ・オール１遺跡、ハラート（Хараатын балгас）３遺跡にある。匈奴、契丹の城郭では確認されていない。また殆どの城内で瓦葺き建物の基壇が残されている。

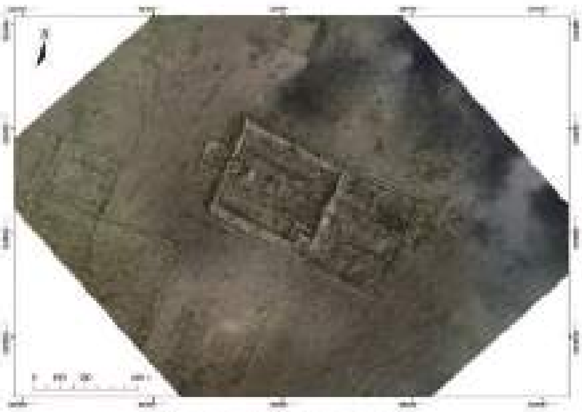
壁外区画；城外壁の一端に寄せて付加された土塁で囲われた区画である。主郭と一体に機能したものだろうが、詳細は不明である。ハラート５遺跡、シャルツ・オール１遺跡で認められる。

工（H）字形の建物配置：シャルツ・オール１遺跡の中央にある２基の建物は、軒廊で接続していた。接続の詳細は不明ながら、このような建物配置は、ハル・バルガス遺跡、ポル・バジン遺跡でも認められる。匈奴や契丹の城郭では確認されていない。

尚、上記の特徴を全く持たない城址もある。また一つの城址に全ての特徴が備わっているわけではない。角楼のみでは難しいものの、現状ではその他の要素があれば、モンゴル高原ではウイグル可汗国期の城と判断できそうである。シャルツ・オール１遺跡では、東正面、城内区画、城外区画、工（H）字形の建物配置が認められた。この点からもウイグル可汗国の城と推定できる。

ウイグル可汗国期の主要城郭分布

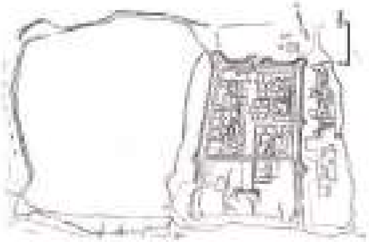
1. シャルグ・オール1　2. ボル・バジン　3. バイ・バリク　4. ヘルメン・デンジ　5. チレン・バルガス　6. ハラート5
7. ハル・バルガス　8. ルンギン・ドゥルグルジン　9. グゼグ・ブルディン・バルガス　10. ツァガーン・スミン・バルガス



ハル・バルガス宮殿址（木山ほか2022）

チレン・バルガス
（木山ほか2022）

ボル・バジン
（Haiduk 2017）



ヘルメン・デンジ5
（オチル他2007）

ツァガーン・スミーン・バルガス
（木山ほか2022）

ハラート5（木山ほか2022）

ウイグル可汗国期の城郭に認められる形態的特徴

遺跡	方正形	二重構造	四周突出門	突出した角楼	城内部の区画	[illegible]	[illegible]
ハルバルガス宮殿址	○	○	○	○	○		○
チレン・バルガス		○	○	○			
ヘルメン・デンジ		○	○	○			
ボル・バジン	○		○	○			○
ツァガーン・スミーン・バルガス	○	○		○			
ハラート5						○	
シャルグ・オール1	○				○	○	○

図４　ウイグル可汗国の城郭

おわりに

ウイグル可汗国の北東は室韋の領域である。実際、同集団が残したとされるブルホトゥイ文化や謝爾塔垃文化の文化圏が広がる地域である。オルズ川は、これらの文化圏内か近接する。遺跡からは、土器など日常什器の出土もなく生活痕跡はない。居住施設とは考えにくく、室韋に対する儀礼的な象徴空間、地方官衙の役割を担ったと考えている。ウイグル可汗国の城は、首都地域のオルホン川流域を中心に故地であるセレンゲ川やトゥヴァ共和国に広がる。本城は北東縁で孤立した位置ある。しかし､版図の境界にあり、他集団に対して威容を誇るためにこそ、このような高規格な城を造営したのではないだろうか。

モンゴルの古代・中世の城や囲壁遺跡では構造が把握できている事例は殆どない。本遺跡は小型遺跡ではあるが、その設計や全容が把握できる事例として、非常に貴重である。モンゴルの城や大型施設の建造や造瓦は、どの時期も「中国」の技術を基礎とする。しかし、その技術や設計の背景をそのまま取り入れるものではない。草原世界独自の嗜好を組み込んだものであった。どのような改変が行われているのか、草原世界と中原との関係を示すものであり、その様相把握は重要な課題であろう。また「中国」の城は大型で長期利用されるため、小型の官衙の建物や、細かな時期などは捉えにくい。一方、モンゴルの城や囲壁遺跡の経営期間は限定的であり、建造時期が特定できるものも多い。そのため、モンゴルにおける突厥やウイグル可汗国の城や大型建物の検討は、併行する唐の官衙の在り方や瓦などの編年を考える上でも参照基準となりうる。この点でも意義が大きい。

引用文献

A.オチル・A. エンフトル・L. エルデネボルド（清水奈都紀訳）2007「ハル・ブフ城址とトーラ川流域の契丹都市・集落」松田孝一編『内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究』平成17年度～19年度科学研究費補助金基盤研究（B）ニューズレター02、１～119頁

木山克彦、中村大介、臼杵勲、正司哲朗、アンフバイル バツォーリ、ガルダン ガンバートル、ロチン イシツェレン2022「モンゴル国における匈奴とウイグルの城址」『埼玉大学紀要. 教養学部』58（１）125～148頁

城倉正祥2021『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

K.Kiyama, L.Ishtseren, M.Sagawa, T.Shoji et.al 2020 Archaeological study on the structure and the date of Shalz Uul-1. АРХЕОЛОГИЙН СУДЛАЛ.39

Kuitems, M., Panin, A., Scifo, A., Arzhantseva, I., Kononov, Y., Doeve, P., Neocleous, A., Dee, M. 2020 Radiocarbon-based approach capable of subannual precision resolves the origins of the site of Por-Bajin». Proceedings of the National Academy of Sciences. 117 (25): 14038–14041.

Очир, А., Одбаатар, Ц., Эрдэнэболд, Л., Анхбаяр, Б. 2019 *Монгол улсын нутаг дахь Уйгурчуудын археологийн дурсгал.* Улаанбаатар.

内蒙古自治区文物考古研究所2018「新忽熱古城考古発掘」『内蒙古考古年報』第15期29～31頁

中国内蒙古自治区文物考古研究所・蒙古国遊牧文化研究国際学院・蒙古国国家博物館2008『蒙古国浩騰蘇木烏布尔哈布其勒三号四方形遺址発掘報告』文物出版社

Burkart Dähne 2017 *Karabalgasun – Stadt der Nomaden: Die archäologischen Ausgrabungen in der frühuigurischen Hauptstadt 2009–2011*. Forschungen zur Archäologie außereuropäischer Kulturen; Bd. 14